



1. 無防備都市東京
2. 月面と土木工学
3. モンテパルミエへの反省
4. PR をほめる

1. 東京に大地震が起きれば、「火災の60%は市民が消すだろう、という前提ほど当てにならない数字はない」。「化学消防車とは何か。それが設備すべき規定は今のところ全くない。普通の圧力で水をかけること以外の何かをすることができる消防車を全部化学消防車と呼んでいる。これが東京の面積に対し30台になったところで何の意味があるろう（現在22台、これを30台に増強すると消防庁で準備中という）。「避難所として公園、広場云々というのはきわめて部分的な火災の場にだけふえることで、大火災で広場、広い道路がいかに危険か、大正12年と昭和20年に僕たちは経験した」。

災害に関心の深い作家の有馬頼義は、東京消防庁火災予防対策委の「いま東京に関東大地震が起こった場合の想定」を紹介しつつ、上述のように批判している。さらにいくつかの資料を加えつつ、無防備な“世界的都市”東京の災害への危機を想定している（中央公論9月号）。なお、同誌には100ページ近くを“関東大震災の体験と教訓”に当て、各界の名士の大正12年の経験記を細かく紹介している。一昨年ノエル・ブッシュが関東大震災について、数多くのインタビューをもとにまとめた“Two Minutes to Noon”も、有意義かつ興味深かった。災害国日本としては、過去の大災害についてあらゆる角度からの検討をもっともっと追究すべきであろう。 [S]

2. 日本時間7月31日にアメリカのレインジャー7号は月面の精密写真撮影に成功した。『宇宙工学で一番金を食うのもまた利益を上げるのも土木屋さん』という糸川氏の話にいきさかとまどった座談会『宇宙開発と土木技術の役割（本誌昭和38年6月号）』で伝えられた予告——近くレインジャーが月表面を観察した諸データを地表に送信する——ことが1年を経てここに実現したのである。

地上と宇宙での特殊構造物、月基地の構築、月面上での輸送と生活環境などが、宇宙開発における土木技術の課題として指摘されており、しかも今度の精密撮影によって、直径90cmほどの小さな凹凸がありそうだ、ズブズブめり込むほどの宇宙塵堆積はなさそうだなどの推定が下されようとしている。構築基礎や車両形式の巧夫について模索のわくがいささかなりともせばめられたと見て良からう。ところで、他人事のようにもあるが国際的なこの種の研究課題について、その後わが国の研究の層はどれだけ厚くなったろうか。不明にしてまだそれを耳にしなさい。年次大会での研究発表が未曾有の393編に達したとはいえ、宇宙開発にまでわが土木界は手が回らぬというべきか。 [C]

3. 8月号の論説で村上建設省土木研究所長も指摘しておられる通り、急速に新技術を取り入れてきた土木界もその源泉はほとんど外国からの技術導入によるといった後進国的性格から脱却できなかったが、7月30日夢のせんいポリプロ製造の基本特許に対し下された特許庁の無効審決は多くの点で注目されるべきであろう。争ってモンテに参り導入料を上げられたわが国一流会社の行動は、わが国の業者同志で頭をたたき足を引張るといった激烈な過当競争を演じたあげく、原材料の輸入価格を引き上げ製品の輸出価格を引き下げるといった慢性的国賊行為の端的現われであろう。バナナの輸入価格を上げられたために流出した外貨は莫大であったといわれるし、不当に高いといわれるポリプロの技術導入料は今回の無効審決で引き下げられることはなかろうと提携会社は得々としている。全く割り切れない現象ではあるが血みどろの過当競争をしいられている業界だけを責めるのは、東京の生活を支えている過密ダイヤの国鉄やダンプトラックの起こした事故を大道狭しと占領した高級輸入車内から悠々批判するたぐいであろう。固有の基本技術を生み育ててゆくさいの一切の障害を法的にまた政策的に排除してゆく英断こそ現時点のわが国で最も要請されているのではなわろうか。 [J]

4. 子よ 親たちが 道は永久につきることなし
きずいた道をさらに伸ばせ 太陽の下でかがやき
孫たちよ 前世代が 闇をつらぬき
伸ばした道をさらに伸ばせ つきることなし

8月2日開通した首都高速道路公団の羽田～新宿間を告げるポスターは、夕陽に映える高速道路を背にこの詩を入れ特異な味を出し好評であった。同公団のこの種一連のPRに対する努力は賞賛に値しよう。